

伝四条遺跡内出土遺物についての考察

岡田雅彦¹⁾・木村理恵¹⁾

要旨 当研究所に土器や瓦などの寄贈があった。採集された地点は、綏靖陵の東側と伝えられている。周辺の遺跡から出土した瓦の様相と異なること、四条遺跡 38 次調査の調査成果から、綏靖陵の東付近で採集されたことはほぼ間違いないと考える。今までこの地点では寺院と考えられる痕跡がなかったが、今回新たにこの地点を四条廃寺と仮称した。

四条廃寺は 7 世紀後半に創建され、採集された瓦から 7 世紀末～8 世紀初頭には、興福寺または藤原氏と関係のある寺院であった可能性がある。また、綏靖陵は律令期の神武陵との考えがあることや、江戸時代には神武陵の候補の一つであったことから、四条廃寺は神武陵に対する陵寺であった可能性がある。

キーワード 四条遺跡、瓦、川原寺式、興福寺式、寺院跡

I. はじめに

本資料は令和 4 年 7 月に、個人より当研究所に寄贈された資料で、瓦、土器類、石製品、石器など遺物コンテナ約 5 箱分あった。寄贈者の先々代が奈良県橿原市の綏靖陵の東側、医大グラウンドの南西に畑を所有しており、そこでかつて採集されたと伝えられるもので、表採場所は四条遺跡内に該当する。本稿ではその中でも土器と瓦を中心に紹介し、資料の歴史的評価をしたい。

II. 土器・石製品

土器類には、弥生土器、土師器、須恵器、陶器、土製品があり、石製品には硯がある（図 2・表 1）。1～5 は弥生土器で、1 は蓋、2 は鉢、3～5 は甕である。3 は底部に穿孔がみられる。6 は土師器小型丸底壺で、古墳時代前期のものと考えられる。7 は土師器碗 C¹⁾ で 7～8 世紀のものであろう。8 は土師器皿で 10～11 世紀のもの、9 も土師器皿で 14 世紀頃のものであろう。10 は土製の小さい当て具である。11・12 は土馬の尻尾付近の破片である。13～19 は須恵器で、13 は杯である。14・15 は古墳時代後期のもので、14 は杯身、15 は長脚二段の高杯であり、透かしが 2 方向にみられる。16 は台付長頸壺で、脚部には 2 方向に透かし孔、体部外面に列点文が施され、自然釉がみられる。17 は大型の甕である。東海地域の窯では 8 世紀代まで台付の甕が生産さ

れるようである（愛知県史編さん委員会 2015）。18 は壺 A で、7～8 世紀のものと考えられる。19 は須恵器壺 M で、8 世紀代のものと考えられる。20 は石製の硯である。中心部に線刻がみられる。石の硯は平安時代後半頃から出現し、中世以降に多く用いられるようである（石井 1985）。21・22 はろくろ作りの素焼き陶器皿で、底部に糸切痕跡がみられる。23～26 もろくろ作りの素焼き陶器皿で、底部の刻印から、紀元 2600 年記念に作製された赤膚焼であることがわかる。23・25・26 は灰白色で「赤膚山 東齊」の刻印がみられる。24 は赤褐色で底部には「橿原神宮奉賛祭 昭和十五年十一月二十一日 赤膚山 西松 紀元二千六百年 奈良縣奉祝會」と刻印されており、24 と 23・25・26 は別の工房で製作されたようである。21～26 については採集品ではなく伝世品であろう。（木村）

III. 瓦

（1）軒丸瓦

図 3-1～4 川原寺式複弁蓮華文軒丸瓦である。川原寺出土川原寺 601C と同范である可能性が高い²⁾。摩滅により范傷を確認することができなかったが、胎土に砂粒を多量に含むこと、軟質な焼成であることから、601C 3～5 段階に該当するものと考えられる（小谷 2009）。丸瓦広端がわかるものは 1・3 で、ともに凹面側は無加工、凸面側は不明である。3 は丸瓦凹面側にタテキザミ

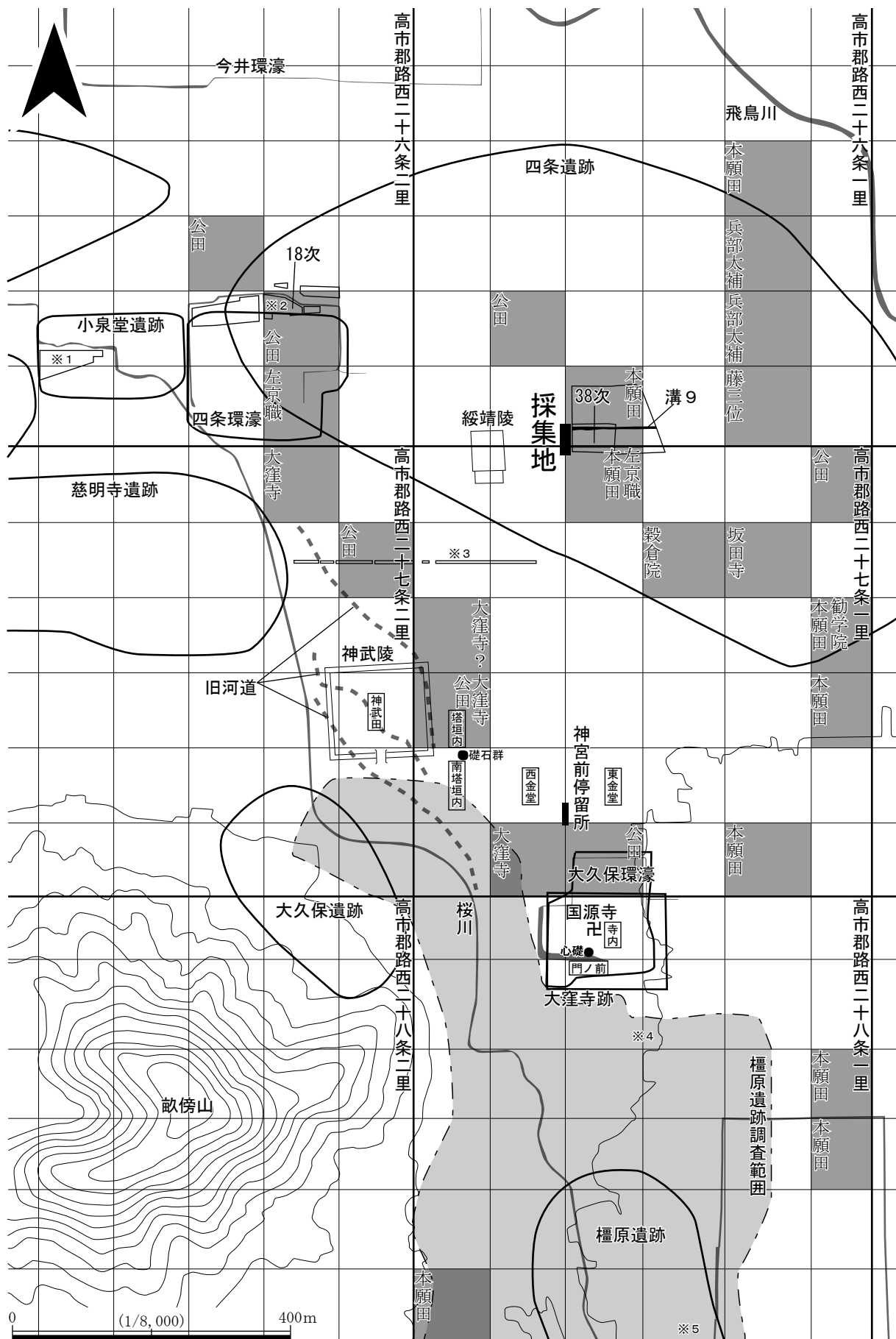


図1 採集地位置図

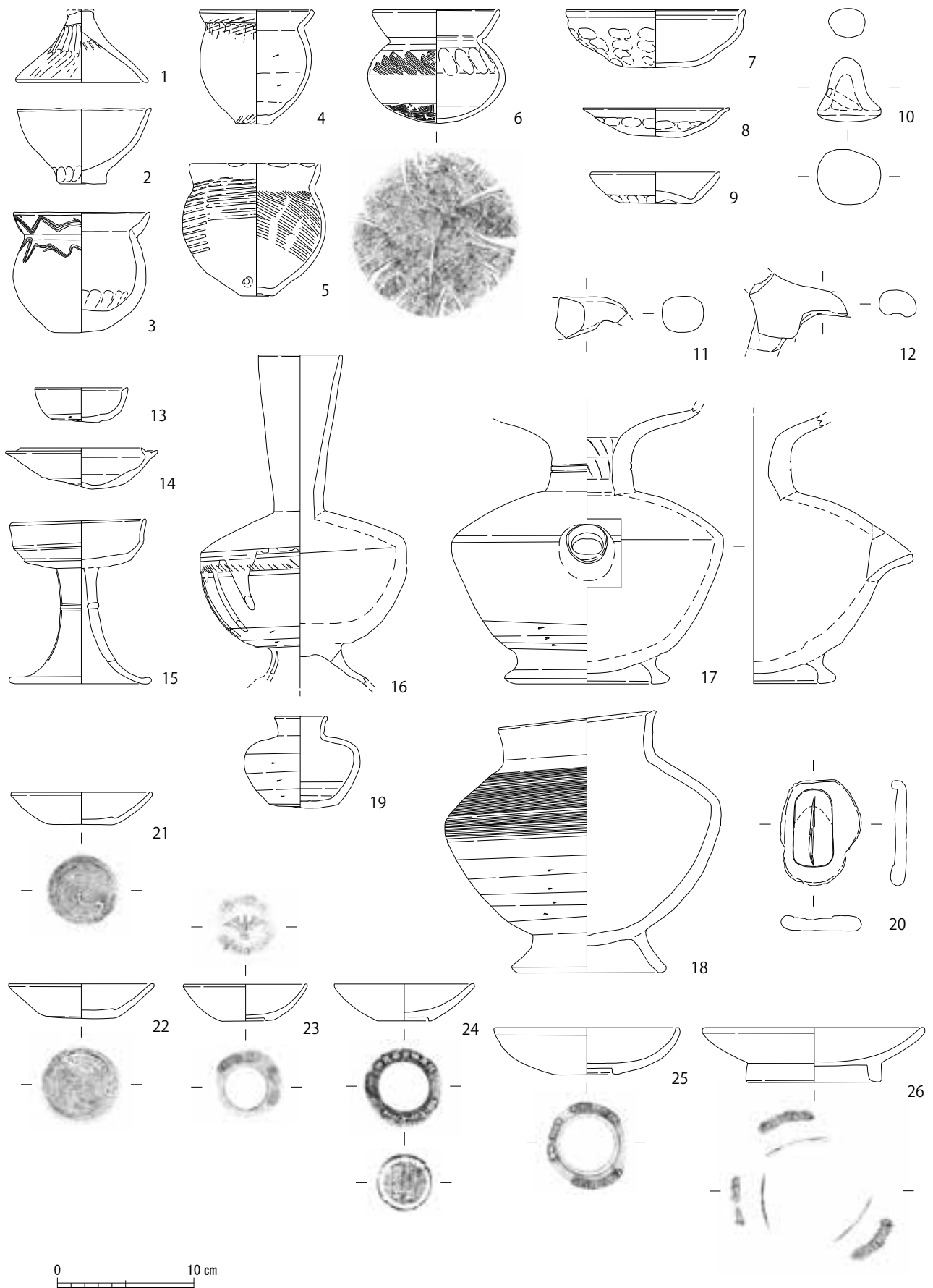


図2 土器・土製品・石製品 (S=1/4)

表1 土器・土製品 観察表

挿 図	個 別 番 号	器 種	法 量 (cm)					残 存 (%)	調 整		胎 土	焼 成	色 調			備 考
			口 径 (復元径)	胴部径	底径	器高 (残存 高)	その他 (残存値)		外 面	内 面			外 面	内 面	断 面	
2	1	弥生土器 壺蓋	9.6	-	-	(5.2)	-	90	横方向のナデ、ナ デ後ミガキ	横方向のナデ、シ ボリ痕	密 1mm以下の細 砂を含む	良好	2.5YR4/4 にぶい赤褐	2.5YR4/4 にぶい赤褐	2.5YR7/6 橙	外面一部、黒斑 あり。
2	2	弥生土器 鉢	9.7	-	3.7	5.5	-	ほぼ 完形	ナデ、斜めナデ、 指頭圧痕	横方向のナデ、縦 方向のナデ	やや密 2mm以下の礫 を含む	良好	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	-	外面一部、黒斑 あり。
2	3	弥生土器 壺	10.0	-	3.6	(8.8)	-	90	横方向のナデ、ナ デ	横方向のナデ、ナ デ、ナデ後指頭圧 痕	やや粗 3mm以下の礫、 雲母を含む	良好	10YR4/1 褐 灰	10YR4/1 褐 灰	10YR4/1 褐灰	底部外面、黒斑 あり。平底。 弥生後期？
2	4	弥生土器 甕	8.4	-	2.5	8.3	-	90	横方向のナデ、タ タキ、ナデ、粘土 貼付？	横方向のナデ、ケ ズリ、ナデ	やや密 2mm以下の礫 を含む	良好	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR6/4 にぶい橙	-	平底。 弥生後期
2	5	弥生土器 甕	(9.6)	10.4	2.2	9.7	-	90	横方向のナデ、タ タキ、ナデ、木葉 痕	横方向のナデ、ハ ケ後縦方向のナ デ、ナデ	やや粗 3mm以下の礫 を含む	良好	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR5/3 にぶい褐	-	口縁端部欠損し ている箇所多 い。穿孔。弥生 後期
2	6	土師器 小型丸底壺	(9.2)	10.0	-	8.3	-	80	横方向のナデ、ハ ケ、横方向のナデ、 ハケ後線刻	横方向のナデ、指 頭圧痕、横方向の ナデ、一方向のナ デ	密 2mm以下の礫 を含む	良好	5YR7/4 に ぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	5YR7/4 にぶい橙	外面一部、黒斑 あり。古墳前期
2	7	土師器 椀C	13.1	-	-	4.2	-	ほぼ 完形	横方向のナデ、指 頭圧痕、指頭圧痕 後ナデ	横方向のナデ、一 方向のナデ	やや密 2mm以下の礫 を含む	良好	5YR6/4 に ぶい橙	5YR4/5 赤 褐	-	口縁部、楕円形 に歪む。口縁 端部、煤付着？ 内面に付着物あ り。8C代か
2	8	土師器 皿	10.7	-	-	2.1	-	80	横方向のナデ、指 オサエ	横方向のナデ、指 頭圧痕	密 1mm以下の細 砂、雲母を含む	良好	10YR7/3 に ぶい黄橙	7.5YR4/3 褐	7.5YR4/3 褐	10C 後半くらい か
2	9	土師器 皿	9.4	-	4.7	2.3	-	完形	横方向のナデ、指 頭圧痕、指頭圧痕 後ナデ	横方向のナデ、見 込み圏線	やや密 3mm以下の礫 を含む	良好	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	-	口縁端部内外面 に灯明痕（煤付 着）。14C くらいか
2	10	土製 あて具	-	-	-	-	長さ 4.7 幅 4.7 厚さ 2.6	完形	-	-	密 2mm以下の礫 を含む	良好	7.5YR6/4 にぶい橙	-	-	把手の転用？
2	11	土馬	-	-	-	-	長さ (5.3) 幅 (4.2) 厚さ 2.6	-	ナデ	-	やや粗 2mm以下の礫 を含む	良好	5YR4/4 に ぶい赤褐	5YR4/4 に ぶい赤褐	-	
2	12	土馬	-	-	-	-	長さ (7.3) 幅 (6.0) 厚さ 1.7	-	ナデ	-	密 2mm以下の礫 を含む	良好	5YR4/4 に ぶい赤褐	5YR4/4 に ぶい赤褐	-	
2	13	須恵器 ミニチュア 杯	6.7	-	-	2.5	-	完形	回転ナデ、回転ヘ ラケズリ	回転ナデ	密 1mm以下の細 砂を含む	良好 堅緻	10Y6/1 灰	10Y6/1 灰	-	外面、自然釉か かる。
2	14	須恵器 杯身	9.0	-	-	3.0	受け部径 11.2	80	回転ナデ、回転ヘ ラケズリ	回転ナデ、一方向 のナデ	やや密 3mm以下の礫 を含む	良好	N7/ 灰白	2.5Y7/1 灰 白	2.5Y7/1 灰白	
2	15	須恵器 高杯	10.0	-	10.4	12.0	-	90	回転ナデ	回転ナデ、降灰（自 然釉）	やや密 2mm以下の礫 を含む	良好 堅緻	5Y5/1 灰	7.5Y6/1 灰	2.5Y6/1 黄灰	脚部外面、自然 釉かかる。 透かし2ヶ所
2	16	須恵器 壺	6.2	15.0	-	(23.5)	頸部径 3.8	脚部 のみ欠 損	回転ナデ、回転ヘ ラケズリ、回転ナ デ、自然釉かかる	回転ナデ、降灰（自 然釉）	密 2mm以下の黒色 粒子を含む	良好 堅緻	2.5Y7/3 浅 黄	10YR7/2 に ぶい黄橙	7.5Y5/1 灰	口縁～頸部と胴 部の貼付が歪ん でいる。透かし 2孔。
2	17	須恵器 甕	-	19.9	9.8	(20.1)	頸部径 6.7	口縁 欠損	回転ナデ、回転ヘ ラケズリ、回転ナ デ、貼付高台、自 然釉かかる	回転ナデ、シボリ 痕、回転ナデ、降 灰（自然釉）	やや粗 2mm以下の礫 を含む	良好	10Y6/1 灰	7.5Y4/1 灰	7.5Y4/1 灰	
2	18	須恵器 壺	11.6	20.2	10.1	19.1	-	90	回転ナデ、回転ナ デ後カキ目、回転 ヘラケズリ、回転 ナデ、自然釉かかる	回転ナデ、ナデ	密 2mm以下の礫 を含む	良好 堅緻	5Y6/1 灰	N5/ 灰	5Y6/1 灰	
2	19	須恵器 壺M	3.9	8.5	-	6.7	-	ほぼ 完形	回転ナデ、回転ヘ ラケズリ、ヘラ切 り無調整	回転ナデ	密 1mm以下の細 砂を含む	良好 堅緻	5Y5/1 灰	5Y5/1 灰	5Y5/1 灰	外面、自然釉か かる。 8C代か？
2	21	陶器 皿	10.4	-	5.0	2.4	-	90	回転ナデ、糸切り 底	回転ナデ、圏線	密 雲母を含む	良好	5YR5/4 に ぶい赤褐	5YR5/4 に ぶい赤褐	5YR5/4 にぶい赤 褐	
2	22	陶器 皿	10.6	-	5.1	2.5	-	80	回転ナデ、糸切り 底	回転ナデ、圏線	密 雲母を含む	良好	5YR5/4 に ぶい赤褐	5YR5/4 に ぶい赤褐	5YR5/4 にぶい赤 褐	
2	23	陶器 皿 (赤膚焼)	9.0	-	3.0	2.7	-	完形	回転ナデ	回転ナデ	密	良好	7.5YR8/2 灰白	7.5YR8/2 灰白	-	
2	24	陶器 皿 (赤膚焼)	10.2	-	3.8	2.7	-	完形	回転ナデ	回転ナデ	密 雲母を含む	良好	5YR5/4 に ぶい赤褐	5YR5/4 に ぶい赤褐	-	
2	25	陶器 皿 (赤膚焼)	13.6	-	3.9	3.4	-	完形	回転ナデ、回転ヘ ラケズリ	回転ナデ	密	良好	2.5Y8/1 灰 白	2.5Y8/1 灰 白	-	口縁端部内外面 に灯明痕（煤付 着）。
2	26	陶器 皿 (赤膚焼)	16.3	-	8.0	4.0	-	完形	回転ナデ、回転ヘ ラケズリ	回転ナデ	密	良好	2.5Y8/1 灰 白	2.5Y8/1 灰 白	-	口縁端部内外面 に灯明痕（煤付 着）。

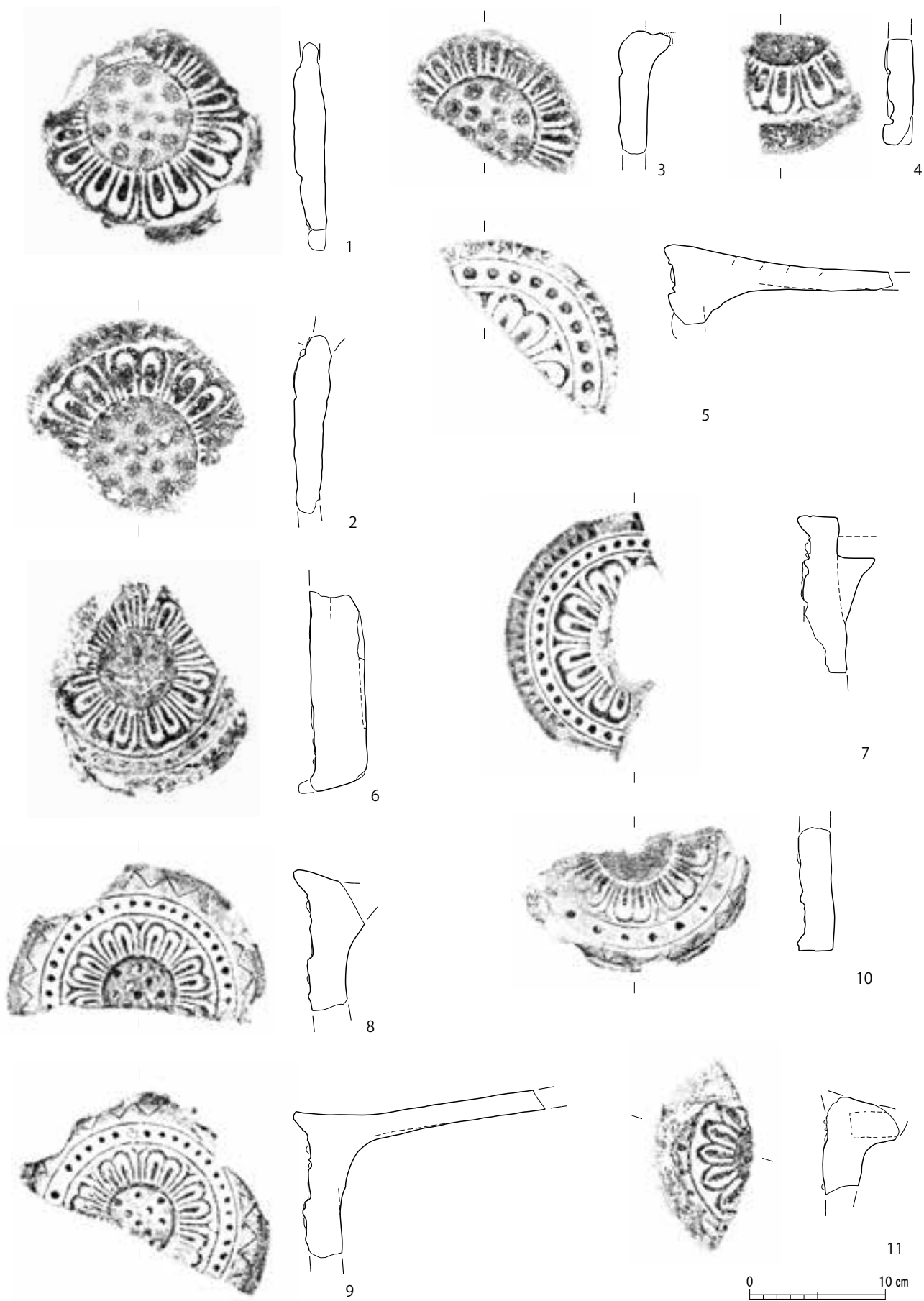


図3 軒瓦 その1 (S=1/4)

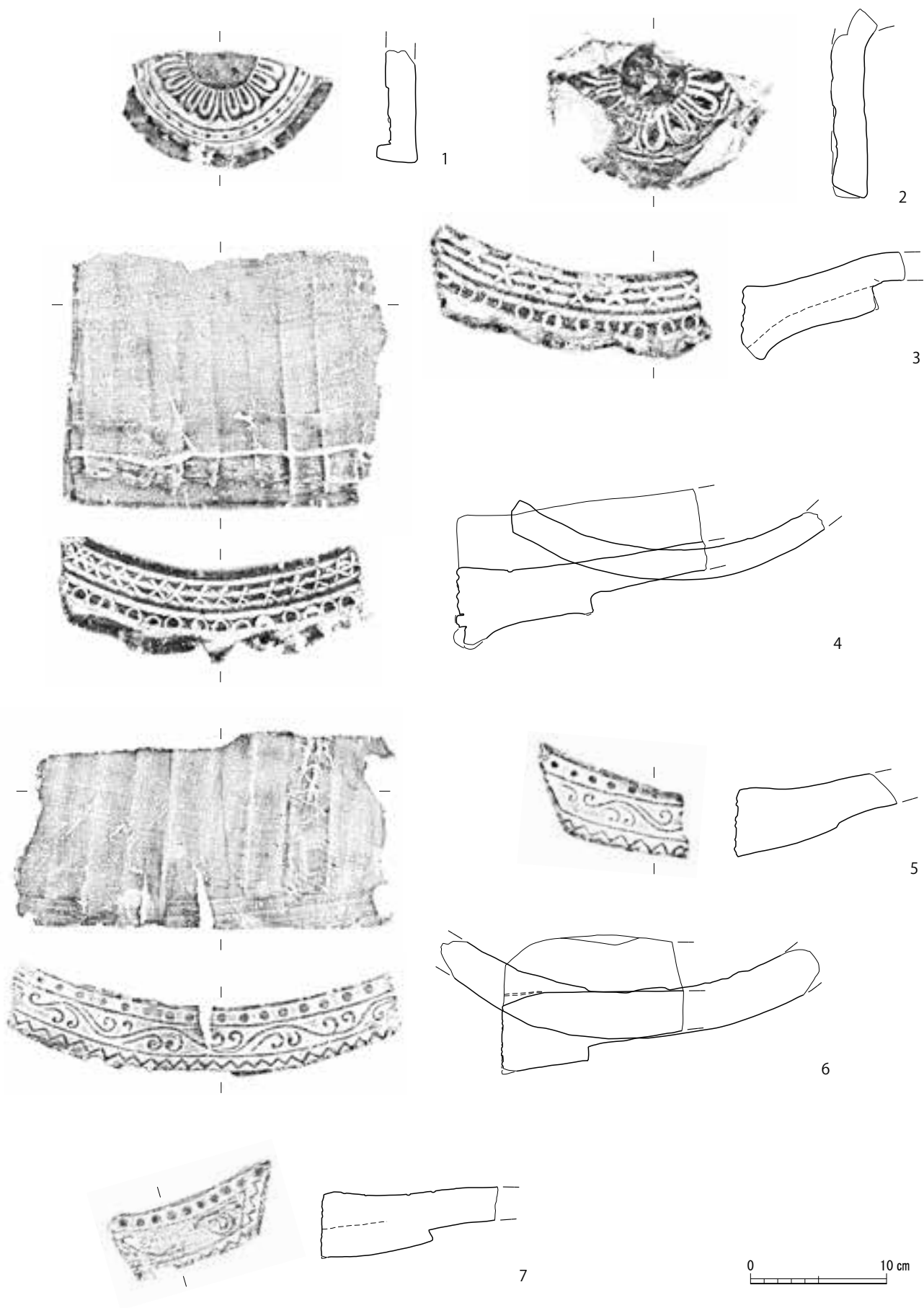


図4 軒瓦 その2 (S=1/4)

が施される。瓦当裏面は摩滅が著しいが、2～4には不定方向のケズリが施される。

5 久米寺式複弁蓮華文軒丸瓦 6271A である。粘土紐模骨巻き作りである。瓦当側縁に範端痕跡が残る。丸瓦凸面はタテナデ、凹面は未調整で布目痕跡が残る。瓦当裏面接合部はヨコユビナデが施される。

6・7 藤原宮式複弁蓮華文 6273B である。丸瓦広端部は、6は凹面側は無加工、凸面側は不明、7は凹凸両面無加工である。7の丸瓦広端面にはスポーク状の浅い刻み目が施される。6は摩滅により調整が分からないが、7は瓦当側面下半部にはヨコナデ、丸瓦部凸面にはタテナデが施される。瓦当裏面はユビナデで中凹みにつくる。

8・9 藤原宮式複弁蓮華文 6275B である。丸瓦広端部が分かるものはない。丸瓦凸面はタテナデが施される。9には丸瓦凸面狭端側にタテ縄タタキが確認できた。丸瓦部凹面は未調整で布目痕跡が残る。瓦当裏面は丸瓦部にむけてユビナデが施される。

10 興福寺式複弁蓮華文 6301A の可能性が高い。摩耗により範傷は不明。丸瓦広端部は、凹面側は無加工、凸面側は面取りが施される。瓦当側縁に範端痕跡が残る。瓦当側面下半部はヨコケズリ、丸瓦凸面はタテナデ、瓦当裏面は不定方向のケズリ、瓦当裏面下縁側ヨコナデが施される。

11 単弁蓮華文軒丸瓦である。丸瓦広端部は凹凸両面無加工である。丸瓦凸面にはタテケズリが施される。瓦当裏面丸瓦際は強いユビオサエが施される。川原寺 701 と同範、豊浦寺、奥山廃寺、橘寺と同範の可能性ある(山崎 1980)。平安時代か。

図 4-1 複弁蓮華文軒丸瓦である。瓦当裏面は丁寧なユビナデ、瓦当側面下半部はヨコナデが施される。平安時代か。

2 複弁蓮華文軒丸瓦である。丸瓦広端部は凹凸両面無加工である。瓦当裏面は丁寧なナデにより平坦に仕上げ、丸瓦際は強いユビオサエが施される。瓦当側面下半部ヨコナデ、丸瓦凸面にはタテナデが施される。平安時代か。

(2) 軒平瓦

図 4-3・4 久米寺式幾何学文軒平瓦 6561A である。

粘土板成形は粘土紐巻き上げの可能性が高い。凹面は瓦当側に 3～4 cm ほどの丁寧なヨコナデが施され、それより先は未調整で側板痕跡、布目痕跡が残る。顎は粘土板貼り付けケズリ出し段顎となる。凸面は顎部及び平瓦部はタテ縄タタキ後ヨコナデが、顎部から平瓦部にかけて強いユビナデが施される。4は、瓦当面から 7 cm から 13 cm の間にいわゆる朱線が確認できる³⁾。3は、焼成が軟質で、4は硬質だが、ともに胎土にシャモットや砂粒が入る。

5・6 薬師寺式偏向唐草文軒平瓦 6641E である。5は摩耗により分からないが、6は範傷から2段階Ⅱグループである(石田 2010)。粘土板成形は粘土紐巻き上げの可能性が高い。凹面は瓦当側に 3 cm ほどのヨコナデが施され、それより先は未調整で側板痕跡、布目痕跡が残る。顎は粘土板貼り付けケズリ出し段顎となる。凸面は顎部はヨコケズリ、平瓦部はタテ縄タタキ後顎部側にのみ細かい単位のヨコケズリが施される。5の胎土にはクサリ礫が入る。

図 5-1 藤原宮式偏向唐草文軒平瓦 6642C である。粘土板成形は粘土紐巻き上げである。上外区左から 5 つ目の珠文から下外区左から 2 つ目の珠文へ連続する範傷が、上外区右から 2 つめの珠文に範傷がある。凹面は瓦当側に 4 cm ほどのヨコケズリが、それより先は未調整で側板痕跡、布目痕跡が残る。顎は粘土板貼り付けケズリ出し段顎となる。凸面は顎部はヨコケズリ、平瓦部はタテ縄タタキ後顎ヨコナデし、顎部際にヨコケズリを、顎部から平瓦部にかけて強いユビナデが施される。胎土にはクサリ礫が入る。

図 4-7 藤原宮式偏向唐草文軒平瓦 6645A である。凹面は摩滅しておりわかりにくい、未調整で側板痕跡、布目痕跡が残る可能性がある。瓦当側に 1 cm ほどのヨコケズリが施される。顎は粘土板貼り付け後切り込みを入れて余分な粘土を切り離して段顎とする。凸面調整は摩滅により不明。

図 6-1 連珠文軒平瓦である。13 個以上の珠文を並べ、珠文のまわりには界線を配する。向かって左から 6 番目の珠文が上の界線に寄る特徴がある。隅軒平瓦で、釘孔が 2 カ所確認できる。釘孔は焼成前に凹面から凸面に向けて穿孔する。瓦当面にはハナレ砂が、外縁にナデが施される。凹面は未調整で布目痕跡が残る。瓦当際は

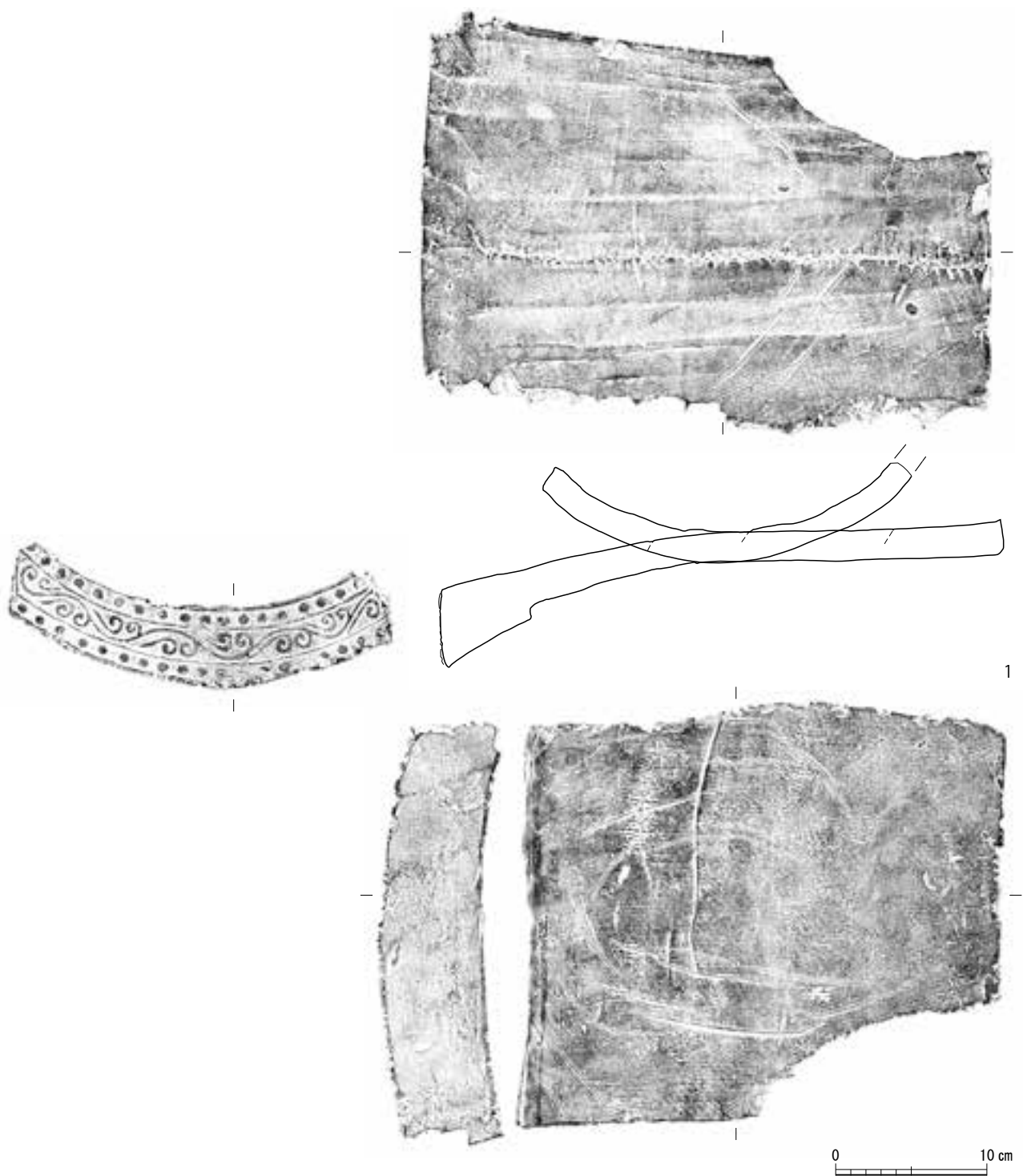


図5 軒瓦 その3 (S=1/4)

瓦当に平行する浅い面取りが施される。凸面は顎部はヨコナデ、平瓦部は摩滅により不明（タテナデか）。平瓦部顎際には凹型成形台痕跡が残る。中世Ⅱ期（1210～1260年）か（山崎 2000）。

2・3 半截菱形文軒平瓦である。中心飾りは三葉を三角で囲んだような文様で、左右には唐草が4回反転

し、文様の外には界線が廻る。瓦当貼り付け技法で成形される。外区は丁寧なナデが、上外区上縁に凸レンズ形の面取りが施される。凹面は布目痕跡を瓦当側から15cm程まで丁寧なヨコナデを施される。顎部はヨコナデが、顎裏面から平瓦部にかけてヨコナデが、平瓦部は粗い斜格子状の模様を刻んだタタキを施した後、顎部

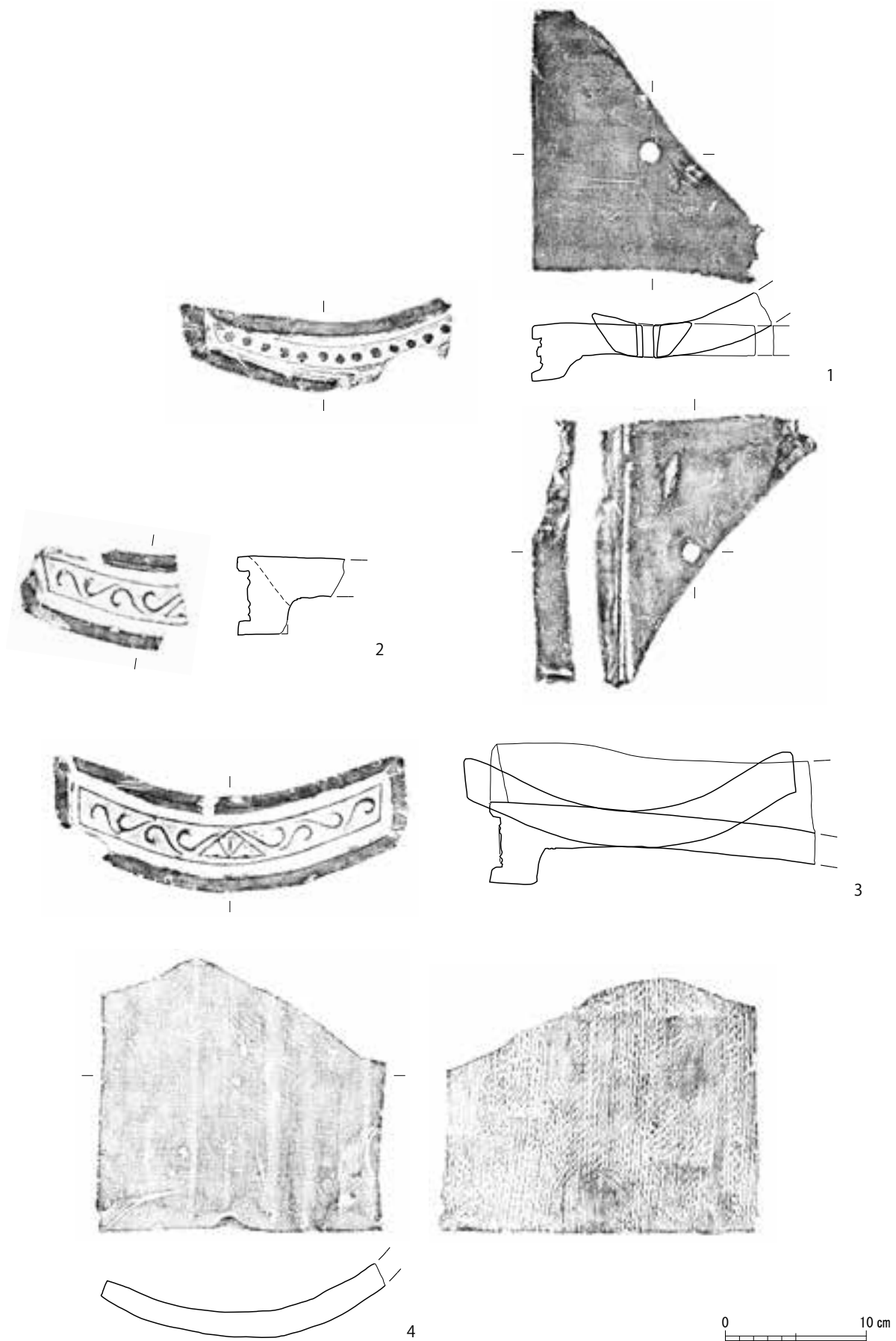


図6 軒瓦 その4 (S=1/4)

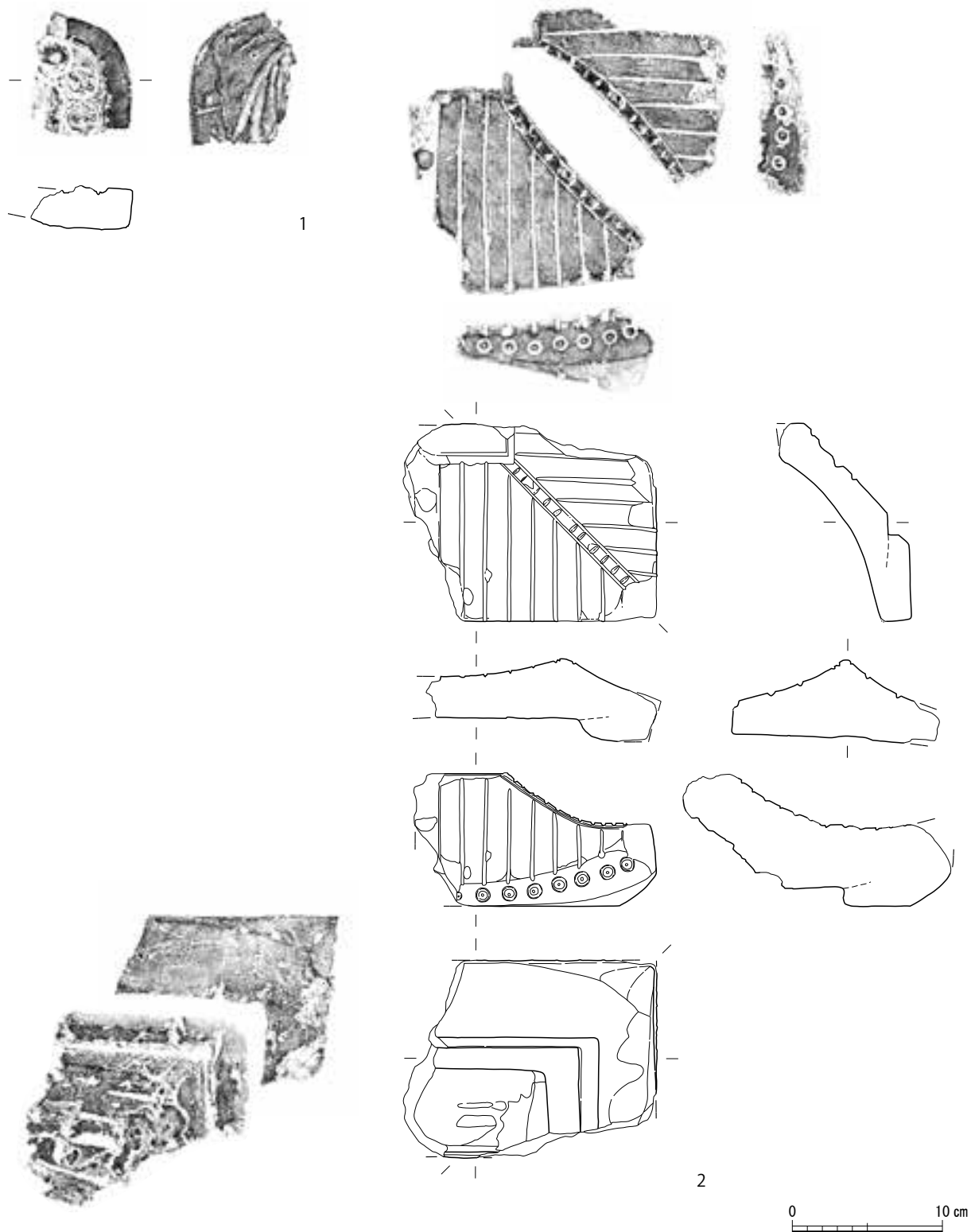


図7 道具瓦 (S=1/4)

側に丁寧なタテナデが施される。平瓦部顎際には凹型成形台痕跡が残る。川原寺と同範、橘寺とは同範の可能性がある（奈良国立文化財研究所 1960、奈良県立橿原考古学研究所 1999）。瓦当貼り付け技法、顎後縁の面取り、文様から中世Ⅴ～Ⅶ期（1333～1490 年）か（山崎

2000）。

（3）平瓦

図6-4 凹面は未調整で、側板痕跡、布目痕跡、糸切り痕跡が残る。凸面にはタテ縄タタキが残る。平瓦側面

は凹面を基準にして右側面は調整が施されておらず、割られたままであるが直線的である。人為的に割った可能性もあり、やや幅広ではあるが熨斗瓦の可能性もある⁴⁾。

(4) 鬼瓦

図7-1 珠文は型押しで反時計回りに押している。外縁および側面は丁寧なナデ、裏面は粗いケズリ、裏面側縁に面取りが施される。

(5) 瓦塔

図7-2 屋根部の瓦は一本の線刻で示し、軒瓦は屋根の線刻の先に軒丸瓦を竹管で表現する。屋根は軒先でやや反り返り、降棟の丸瓦継ぎ目を線刻で表現する。屋根は丁寧なナデのあと線刻し、裏面は重ね合わせの段部は型作りで未調整、それ以外を粗いナデが施される。

IV. 採集瓦の評価について

(1) 採集地周辺で確認された瓦

今回報告した瓦は、綏靖陵の東側で採集されたと伝わるものである。この地点は今まで寺院があった痕跡は確認されておらず、『奈良県遺跡地図』には藤原京跡および四条遺跡として登録されているだけである。

ところで、採集されたと伝わる地点の周辺には、瓦が出土する遺跡が確認されている。まずは、これらの瓦の様相と採集された瓦の様相を比較することで、採集地と伝わる地点が綏靖陵の東で齟齬がないかを確認する。確認する遺跡は、大窪寺跡、樞原遺跡、藤原京跡、小泉堂遺跡、四条遺跡19次である。

① 大窪寺跡 (図8・9)

図8-1~3 幅線文縁軒丸瓦である。1・2は素弁、3は複弁である。3は檜前寺ⅡA、橘寺、二光寺廃寺と同範で(清水2009)、神武陵の東辺で採集された(伊藤2002)。

4 山田寺式複弁蓮華文軒丸瓦である。丸瓦先端が未加工であることから、山田寺式でも新しい時期のものである(奈文研2002)。大久保町公民館建替時に出土している(伊藤1999)。

5 川原寺式複弁蓮華文軒丸瓦である。

6 重圈文縁素弁蓮華文軒丸瓦である。田中廃寺Ⅰbと同範である(花谷2000)。

7 久米寺式複弁蓮華文軒丸瓦6271である。

8 複弁蓮華文軒丸瓦6272である。

9~11 藤原宮式複弁蓮華文軒丸瓦である。9は6275A、10は6275B、11は6276Aである。9は小字「門ノ前」で採集され(岩井1937)、10は大久保町公民館建替時に出土している(伊藤1999)。

図9-1~3 重弧文軒平瓦である。1・2は四重弧、3は三重弧となる。1・3は大久保町公民館建替時に出土している(伊藤1999)。

4 久米寺式幾何学文軒平瓦6561Aである。

5 薬師寺式偏向唐草文軒平瓦6641Eである。大久保町公民館建替時に出土している(伊藤1999)。

6 素文縁複弁蓮華文軒丸瓦である。平安時代か。

7 均整唐草文軒平瓦である。川原寺752、坂田寺121A、加守廃寺と同範である(伊藤2002)。平安時代。神宮前停留所付近で採集された(保井1932)。

8・9 巴文軒丸瓦である。巴頭が尖り、珠文帯内外に圈線があることから鎌倉時代頃か。現国源寺周辺で採集された(保井1932)。

10 連珠文軒平瓦である。珠文を19個配し、そのまわりに界線を配する。左から7個目の珠文が上の界線に寄る特徴がある。図10-7と同範である。鎌倉時代か。

11 中心飾りがなく、文様中央から左右に唐草が展開し、まわりに界線を配する。室町時代か。神宮前停留所付近で採集された(保井1932)。

12 均整唐草文軒平瓦である。図6-2・3と同範の可能性が高いが、顎の作りが異なる。室町時代か。神宮前停留所付近で採集された(保井1932)。

また、拓本がないため掲載していないが、薬師寺式偏向唐草文軒平瓦である6641Gや平安時代前期の中心飾りのない均整唐草文軒平瓦薬師寺236も採集されている(名古屋市博物館2006)。

② 樞原遺跡 (図10-1~7)

図10-1 豊浦寺式素弁軒丸瓦である。大窪寺跡南の井戸14(図1-※4)から出土した(樞考博2010)。

2 川原寺式複弁蓮華文軒丸瓦601Eである。大窪寺跡南東に位置する信光寺西南1丁(約109m)(図1-※5)で出土した(樞考博2010)。

3 久米寺式軒丸瓦6271である。出土地点は不明。

4 藤原宮式複弁蓮華文軒丸瓦6276Aか。昭和13年

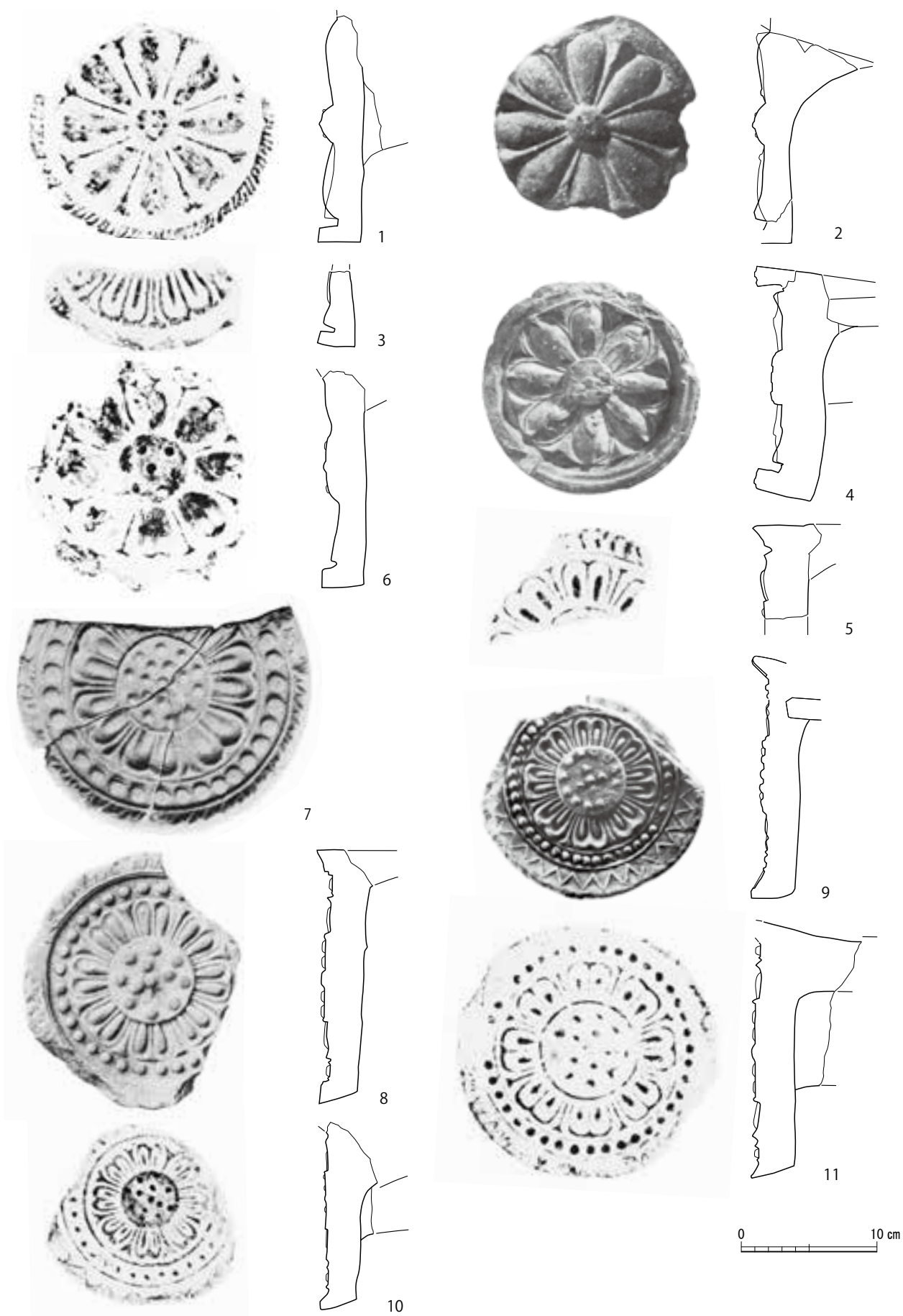


図8 大窪寺採集及び出土瓦 (S=1/4)

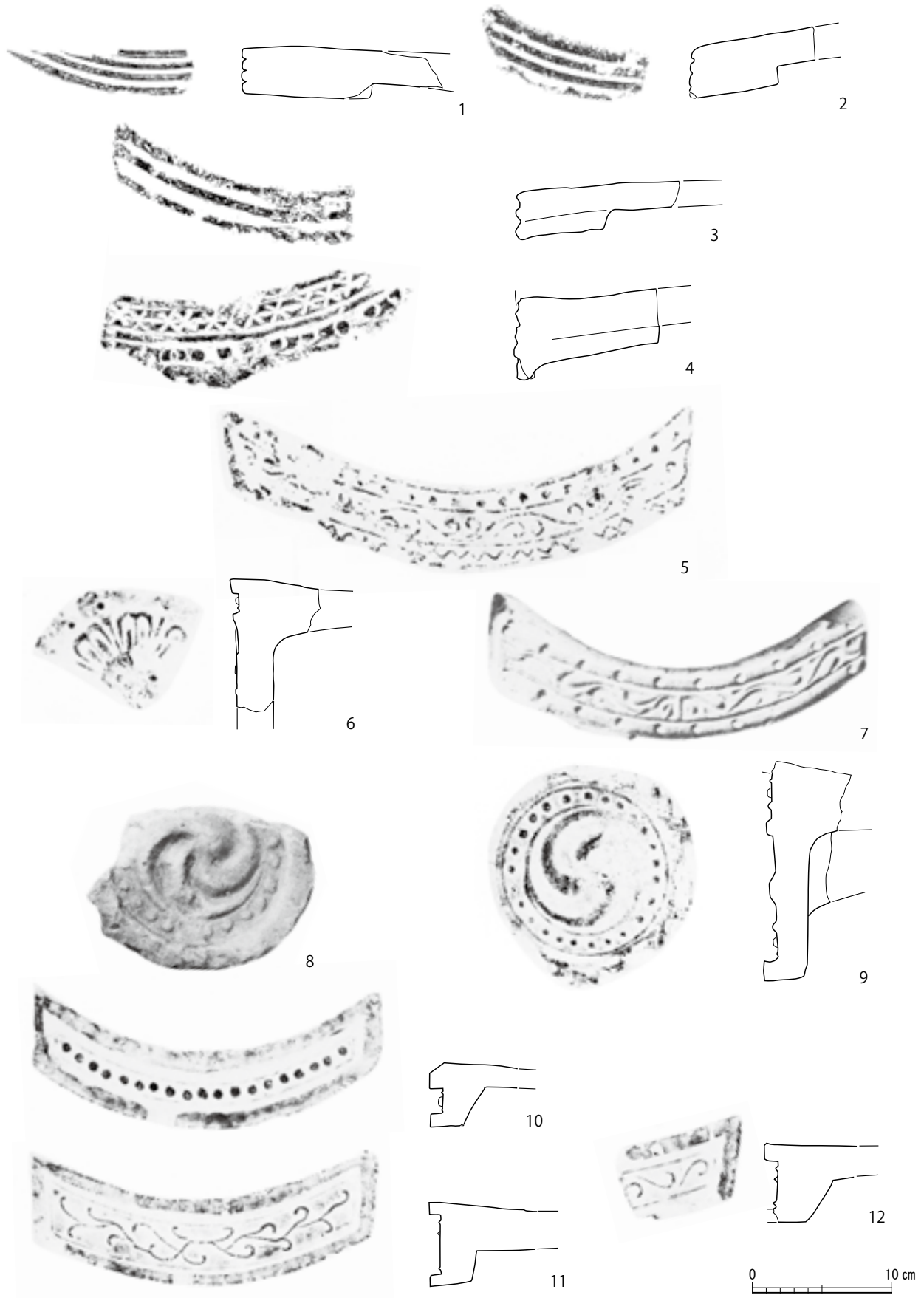


図9 大窪寺採集及び出土瓦(S=1/4)

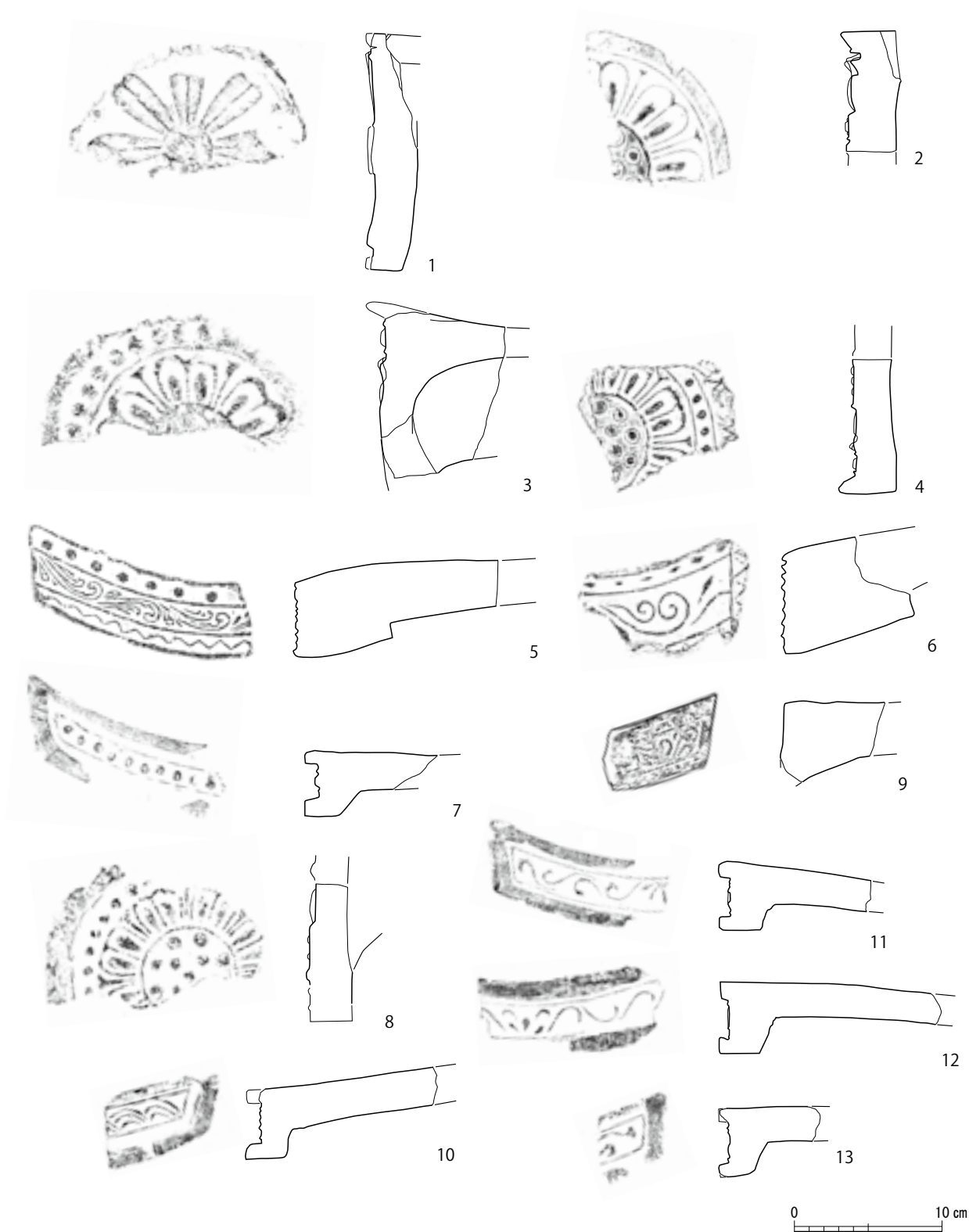


図 10 橿原遺跡他出土瓦 (S=1/4)

(1938) 橿原神宮神域拡張工事で出土した (国立歴史民俗博物館 2006)。

5 偏向唐草文軒平瓦 6644B である。昭和 13 年(1938) 橿原神宮神域拡張工事で出土した (国立歴史民俗博物館

2006)。

6 大官大寺式均整唐草文軒平瓦 6661A である。橿原神宮前整地作業中に出土した (国立歴史民俗博物館 2006)。

7 10個以上の珠文を並べ、珠文のまわりには界線を配する。左から7個目の珠文が上の界線に寄るのが特徴である。図9-10と同範だが、顎の深さが異なる。

③藤原京跡右京五条六・七坪（図10-8）（図1-※3）

8 複弁蓮華文軒丸瓦 6272A である。

③ 小泉堂遺跡（図10-9）（図1-※1）

9 均整唐草文軒平瓦 6721 である。

④ 四条遺跡 19 次（図10-10～13）（図1-※2）

10 波状文軒平瓦である。

11 半截菊花文軒平瓦である。

12 唐草文軒平瓦である。

13 唐草文軒平瓦か。いずれも室町時代か。

小結 小泉堂遺跡、四条遺跡 19 次、藤原京右京五条六・七坪出土の瓦には、今回報告した瓦と同範の瓦は1点も出土していない。橿原遺跡は広範囲で発掘調査がされているが、出土地点が分かるものが少ない。出土地点が確実に分かるものは豊浦寺式と川原寺式であるが、今回報告した瓦には豊浦寺式は確認できず、川原寺式も異范である。以上のことから、今回報告した瓦にこれらの地区で出土したものは含まれない可能性が高い。ところが、大窪寺跡では図8-5・7・10、図9-4・5・12が同範の可能性がある。しかし、大窪寺跡として採集された地点をみていくと、大窪寺跡周辺だけではなく大窪寺跡の北側に位置する小字「西金堂」「東金堂」や神武陵の東側も含まれており、広範囲で採集されたものを大窪寺跡採集瓦として報告されていることがわかる。そのため、今回報告した瓦が採集された地点も、大窪寺跡採集瓦として報告されている可能性は否定できない。ただし、これらが1つの寺院に伴う瓦とするには、あまりにも寺域が広すぎる。そこで大窪寺跡として採集及び出土した瓦の中で、採集地点や出土地点がわかるものの分布をみていくと、大窪寺跡と神武陵の東に集中する。また、これらの地点には心礎や礎石が確認できたり、寺院に係する小字が確認できたりと、寺院があった痕跡が多く確認できる（図1）。これについては、今までの大窪寺跡についての研究でもすでに指摘されてきたことである（保井 1932、石田 1936、春成 1975、大脇 1995・1997、伊藤 1999・2002、清水 2024）。ただし、この寺院のどちらかがいわゆる「大窪寺」と呼ばれたのかについては、まだ確定しているとはいえないと考えるため、今回仮に、

大窪寺跡を「大久保廃寺」、神武陵東を「塔垣内廃寺」とする。

このように大窪寺跡として瓦が採集された範囲は広いが、寺院として現状考えられるのは大久保廃寺と塔垣内廃寺であり、今回報告した瓦が採集された地点はこれらから離れた位置にあり、これらと同一の寺院とするには寺域が広すぎる。これについては、今回報告した瓦が採集されたと伝わる地点の東に隣接する四条遺跡 38 次調査が重要となる。ここからは、藤原京造営前後に掘削・埋没した運河とされる溝9があり、この中から川原寺創建期に使用された特徴的な平瓦である凸面布目平瓦や側面調整を剣先状にする平瓦が出土している（榎考研 2024）。今回報告した瓦にはこの特徴的な平瓦はないが、川原寺でこの特徴的な平瓦と一緒に使用された川原寺式軒丸瓦が採集されている。このことは、今回報告した瓦が綏靖陵の東で採集された可能性が極めて高いことを示している。

以上のことから、今回報告した瓦が採集された地点には大久保廃寺と塔垣内廃寺とは別の寺院があった可能性が高いといえる。本稿ではこれを「四条廃寺」と仮称する。では、四条廃寺はどのような寺院であったのであろうか。

（2）四条廃寺の造営氏族

史料がなく発掘調査事例もないが、採集瓦から四条廃寺の造営氏族について検討してみたい。四条廃寺の創建瓦は川原寺式と考えられる。四条廃寺のように川原寺と同範の川原寺式軒丸瓦は飛鳥とその周辺でも多く確認されているが（花谷 2000、2009）、確認された寺院に特に傾向はみられない。また、平安時代や室町時代の瓦にも川原寺と同範の瓦があるが、これも同様に飛鳥の寺院でも同範の瓦が確認できることから、瓦が共通するだけで川原寺と関係がある寺院とまでいうことは難しい。これら以外に特徴的な瓦として興福寺式軒丸瓦 6301A がある。これは、興福寺創建期に興福寺のために作範され生産された瓦である。この瓦は范が摩耗して文様が不鮮明になっても興福寺で使用され続けた瓦である。さらに、興福寺でも使用された久米寺式軒丸瓦 6271A や軒平瓦 6561A、藤原宮式だが興福寺でも使用されている 6645A なども採集されており、瓦から7世紀末～8世紀初頭に

興福寺と関わりがあった可能性がある。

図1には「興福寺雑役免帳」雲飛庄の本願田（藤原不比等が施入した興福寺領）、不輸祖田、公田を網掛けで示した。採集地点は、興福寺領である本願田に隣接しており、このことも興福寺との関係を示唆している。

採集地である高市郡には、天武元年（672）または天武12年（683）に山階寺を移転した、興福寺の前身寺院である厩坂寺があったとされている（花谷2000）。前者の年代であれば川原寺式の年代に近く、後者の年代であれば久米寺式や藤原宮式に近い。ただし、採集地点が厩坂と呼ばれていた地名である形跡はなく、現在は久米寺が厩坂寺の最有力候補となっており、現状では四条廃寺が厩坂寺とするには材料が足りない。いずれにせよ、興福寺の創建瓦であり、范が摩耗するまで興福寺で使い続けていた6301Aが四条廃寺で使用されていたということから、興福寺もしくは藤原氏と何らかの関わりがあった寺院であると考えたい。

（4）四条廃寺と陵寺

四条廃寺の一番の特徴は、綏靖陵に隣接することである。採集地周辺は、発掘調査により多くの古墳が確認されているが、いずれも藤原京造営に伴い墳丘が削られ、周濠を埋め立てて整地されていることが判明している。その中で綏靖陵だけが削平されていない。そのため、今尾氏は、江戸時代には神武陵の候補にもなっていた事実も合わせて、綏靖陵を律令期の神武陵と考えている（今尾2008）。綏靖陵が律令期の神武陵であった場合、四条廃寺は神武陵に隣接していたこととなる。同様に陵墓に隣接している寺院には、聖武陵に隣接する眉間寺があり、眉間寺は聖武陵に対する陵寺と考えられている。その関係を四条廃寺に当てはめると、四条廃寺も陵寺に該当する可能性がある。ただし、神武陵の陵寺としては、神武陵の東に位置していたが、洪水被害⁵⁾などにより大窪寺跡に移転してきたと伝承がある国源寺がそうであったと考えられてきた（保井1932・春成1975）。そこで、史料から四条廃寺が国源寺と呼ばれていたということを示すことができるのか検討してみることとする。

国源寺創建について記載する最も古い史料は、様々な史料で引用されている表2－史料③（以下表2を省略する）である。貞元2年（977）に畝傍山の東北に大和守

であった藤原国光によって方丈殿が建てられ、観音像が安置されたとする。現在、観音像は大窪寺跡にある国源寺観音堂にあるが、安置されている観音像は永禄6年（1563）に作られていて、この年代とは合わない（史料⑩）。

国源寺の建立後の動向については、天明7年（1787）に書写された史料⑤に記載されている。これには、文治3年（1187）に国源寺は越智家房三男の光恵坊法眼が中興し、建立されたと記載されており、この史料が正しいとすると文治3年（1187）頃には再建する必要があったらしい。12世紀末には国源寺は越智氏が関係する寺院となっているようだが、これは史料⑩・⑫～⑭に、この一帯が越智氏の所領であったと記載されていることと関係するのであろう。史料⑫には、大久保で合戦があったことが記載されており、本当に国源寺が存在していたなら、これに巻き込まれて15～16世紀に廃絶したのだろうか。この頃に廃絶したためか、史料⑰と⑱にあるように17世紀末には国源寺の位置がわからなくなっている。しかし、19世紀頃になると大窪寺跡の位置に国源寺があったと記載されるようになる。これは神武陵選定との関わりによるものであろう。

国源寺について書かれた最も古い史料は史料③である。史料③は高橋氏によって草創の項目については建久8年（1197）に書かれた内容である可能性が指摘されているが、田中氏によって寛文8年（1669）に内容が補入された可能性も指摘されており、国源寺に関する内容は古いものではないかもしれない。そうすると、国源寺に関する史料は全て17世紀以降のものとなり、本当に存在したのか疑わしい。しかも、確実な位置を示すものはなく、史料③に畝傍山の東北と記載されるだけにすぎない。また、すでに廃寺となっていた大窪寺と混同している史料も多い。このように、国源寺の位置を確実に示す史料は存在しない。そのため、本当に国源寺が存在したといえるのであれば、江戸時代には綏靖陵が神武陵との考えもあったことも含めて、四条廃寺は畝傍山東北に位置しており、国源寺の候補として考えることも可能でもある。

以上のことから、陵寺という概念が存在し、綏靖陵が律令期の神武陵であったならば、四条廃寺はその際の陵寺であった可能性は大いにあると考える。そして、本当に国源寺という寺院が存在していたのならば、四条廃寺

表 2 大窪寺・国源寺関係史料

番号	元号	西暦	史料名	内容	引用文献
①			太子伝見聞記 正和三年 (1314) 頃か、	大窪寺 (太子建立四十六院)	石田茂作 1936 「飛鳥時代寺院址の研究」 第一書房
②	朱鳥元年	686	日本書紀	己丑、檜隈寺・輕寺・大窪寺各封百戸、限卅年。辛卯、巨勢寺封二百戸。 ……国源寺……旧記云、国源寺、寺在高市郡畝傍山東北、天延二年三月十一日、早朝、檢校秦善過彼地、途中有人、戴頭白髮、身著茅簑、告秦善曰、師於此地、為國家宋福講一乘矣、秦善問云、公姓名、亦住処何乎、答曰、我是人皇第一国主也、常住此処、言訖不見、故秦善每年三月十一日、到彼地講法華、貞元二年当国守藤原国光、伝聞此事、建方丈堂、安觀音像、永為当寺米寺矣、	宇治谷孟 1988 『全現代語訳 日本書紀 下』講談社学術文庫 834 講談社
③	貞元 2 年	977	多武峯略記 (静胤撰) 建久 8 年 (1197) 作成、 寛文 8 年 (1669) 補入か、	……国源寺……旧記云、国源寺、寺在高市郡畝傍山東北、天延二年三月十一日、早朝、檢校秦善過彼地、途中有人、戴頭白髮、身著茅簑、告秦善曰、師於此地、為國家宋福講一乘矣、秦善問云、公姓名、亦住処何乎、答曰、我是人皇第一国主也、常住此処、言訖不見、故秦善每年三月十一日、到彼地講法華、貞元二年当国守藤原国光、伝聞此事、建方丈堂、安觀音像、永為当寺米寺矣、	高橋照彦 2004 「阿武山古墳小考：鎌足墓の比定をめぐって」『待兼山論叢』史学篇 38 田中稔 1973 「736 多武峰略記」『大日本仏教全書』第 99 卷 (解題 3) 鈴木学術財団・講談社 堀保己 一編ほか 1959 『群書類従』第 19 輯訂正版、続群書類従完成会
④	延久 2 年	1070	興福寺雑役免帳	雲莊田島十六町三段百八歩……大窪寺七段百六十歩 / 廿七条一里卅一一反 卅三一四段百六十歩 廿四一反 二里十二一反……	竹内理三 編 1964 『平安遺文』古文書編 第九卷 (株) 東京堂
⑤	文治 3 年	1187	大和国越智家系図 天明 7 年 (1787) 書写	光憲坊法眼 高市郡雲飛寺四十九院駐傍山国源寺中興開基、文治三年八月国源寺ヲ建立ス。文蒙神武天皇靈動故也。毎年御国忌ヲ勤メ、国源寺ノ境内ニ無遮荒墳ヲ鎮メ祭ル。	山田梅吉 1936 『越智氏の勤王』奈良県教育委員会
⑥	正安元年	1299	関東祈禱寺注文案	関東御祈願所持……大窪寺 上宮太子建立四十六箇内……	竹内理三 編 1984 『鎌倉遺文』古文書編 第二十七卷 (株) 東京堂
⑦	正安 4 年	1302	観音堂 聖徳太子二歳 像頭部内面墨書	為法界衆生二世所願 / ……正安四年九月廿六日覺道	橿原市史編集委員会 編 1962 『橿原市史』橿原市
⑧	至徳 3 年	1386	一条院良昭准庵会講師 段銭帳	大窪寺四町八反半	朝倉弘 1984 『奈良県史』第 10 巻 荘園－大和国荘園の研究－奈良県史編集委員会
⑨	嘉吉元年	1441	興福寺官務牒疏 18C 後半～19C 前半に作成	国源寺。在高市郡坊舎八字、円融院御宇。天延二年三月。美善[秦カ]上人開基。天王神。在同郡忌部。供僧号蓮光寺。……	鈴木美術財団 編 1972 『大日本佛教全書』第 84 巻 (寺誌部 2) 鈴木学術財団・講談社 馬部隆弘 2020 『椿井文書－日本最大級の僧偽文書』中央公論新社
⑩	文明 13 年	1481	大乗院寺社雑事記	昨日遷与多武峯公事出来、無為云々、越智大窪マテ罷出了、	増補続史料大成刊行会 編 2001 『増補 続史料大成 大乗院寺社雑事記七』臨川書店
⑪	文明 14 年	1482	大乗院寺社雑事記	仏聖願ハ大和国……雲飛庄……	朝倉弘 1984 『奈良県史』第 10 巻 荘園－大和国荘園の研究－奈良県史編集委員会
⑫	明応 6 年	1497	明応 6 年記	越智郷焼クル。越智モ壹飯寺引籠云々。大クボニテノ合戦ニ。千代岡井下が弟トヤラン侍共五人。十市手へ打テ首ヲトルト云々。	続群書類従完成会 1978 『続々群書類従』第二輯下 神祇部
⑬	永正 3 年	1506	多聞院日記	今曉戒重城没落了、当国大略武家知行也、慮外々々、越智ハ大窪、十市・管尾以下ハ多武峰、筒井ハ東山内云々	竹内理三 編 1978 『増補 続史料大成 多聞院日記一』臨川書店
⑭			春日進宮領納帳	越智郷方……大クボ領合三石五升	「角川日本地名辞典」編纂委員会 編 1990 『角川日本地名辞典 29 奈良県』
⑮	天文 18 年	1549	越智郷段銭帳	……大窪寺 四町八段半 ……慈明寺 二町八段半	永島福太郎 編 1984 『春日大社文書』第四巻
⑯	永禄 6 年	1563	観音堂 不空絹索観音 菩薩立像台座反花下框 裏面墨書	永禄六年癸亥卯月朔日 / 南都宿院仏師源次作	橿原市史編集委員会 編 1962 『橿原市史』橿原市
⑰	延宝 9 年	1681	和州旧跡幽考	国源寺此跡たづねえず…… (以下多武峰略記引用)	奈良県史料刊行会 1977 『大和名所記』奈良県史料第 1 巻 豊住書店
⑱	元禄 13 年	1700	序中漫録	国源寺不知其在所…… (以下多武峰略記と同じ内容)	奈良県文化・教育・くらし創造部文化資源活用課 2022 『奈良県史料叢書』六 奈良県
⑲	享保 2 年	1736	大和志	大窪廃寺 大久保村古址尚有観音堂又有地名東金堂西金堂 (以下日本書紀を引用) 廃畝火寺 在畝火山一名萬願寺昔有四十二院山中礎石尚多トアリ	長尾京福 著 森川辰蔵 他 校訂 1978 『大和名所和歌集 大和志 日本惣国風土記：大和国』豊住書房
⑳	宝暦 2 年	1752	国源寺縁起	和陽高市郡大久保村 国源寺現在 易宣拝書 抑モ大和ノ国高市郡大久保村神告山一乗院国源寺草創ノ鑑鑑ヲ尋ズルニ…… (以下多武峰略記と同じ内容)	長尾薫・山田正 1982 『橿原神宮史』別巻 橿原神宮庁
㉑	寛政 3 年	1791	大和名所図会	大窪廃寺 大久保村に址あり。観音堂はなり。又地名に東金堂・西金堂あり。畝火山口神社 むかしハ畝火山腹にあり。今山頂に遷す。……また宮寺を国源寺といふ。	藤禹言・秋里籬島 1971 『大和名所図会』歴史図書社
㉒	享和元年	1801	山陵志	……大窪寺の跡は、国源寺に有り。また、伝う、国源寺も、またかつて神武田の旁よりここに遷ると…… (以下多武峰略記と同じ内容)	速藤鎮雄 歌編 1974 『史料天皇陵：山陵志・前王廟陵記・山陵図絵』新人物往来社
㉓	文成 12 年	1829	卯花日記	……かくて南にゆけハ大久保村なり。村の北に大窪廃寺の跡とて東金堂、西金堂の礎石あり。芝生の中に大石七ツハ見たり。又此所に細き河のあるに、此川中も大石あまた見たり。……村の中南の方に国源寺の跡あり。今は小室一字観世音まします。……	橿原考古学研究所 編 1980 『飛鳥京跡関係史料集』2 (近世紀行文篇) 奈良県教育委員会

が国源寺と呼ばれた可能性もある。

V. まとめ

今回報告した土器や瓦・石製品は、採集品という性格上、資料としての扱いは慎重になるべきではあるが、四条遺跡 38 次調査成果から採集地点に齟齬がないことから、この地点で採集されたと考えられる。そのため、今まで知られていなかった寺院が綏靖陵の東にあった可能性は高いと言える。この寺院には寺名が記載された史料がなく、寺院名を明らかにできないため四条廃寺と仮称した。

また、四条廃寺は瓦から 7 世紀後半に創建された寺院で、興福寺や藤原氏と関係する寺院である可能性が指摘できた。そして、綏靖陵が律令期の神武陵であるならその位置から陵寺であった可能性もある。

今回は採集資料でのみ検討したため、あくまで仮定の話しかできていない。今後、採集地一帯の発掘調査が進むことがあれば、より詳細な情報を得ることが可能であろう。(岡田)

i) 橿原考古学研究所 おかだ まさひこ、きむら りえ

謝辞

本稿作成に当たり、大脇潔氏、奥村茂輝氏、新尺雅弘氏から数多くのご助言をいただきました。記して御礼申し上げます。

註

- 1) 古代の土器の器形名称については、奈良文化財研究所の分類に従う(奈良国立文化財研究所 1976・1981)。
- 2) 摩滅により斜縁の外縁に面違鋸歯文があるかどうか確認できるものはないが中房や蓮弁の形状から川原寺出土の川原寺式と考える。川原寺 601A・B・C・E 種で外縁の面違鋸歯文がほとんど見られないものは E 種である。しかし、E 種の中房蓮子は 1 + 4 + 9 となるが本資料は 1 + 5 + 9 となることから E 種ではない。A・B・C 種の内、C 種の中房径が最も大きく本資料も同じ径である。また、瓦当を薄く裏面を平らにつくる製作技法(金子 1983 のⅢ型)は、現状 C 種でしか確認されていない。以上のことから、本資料は C 種と判断した。
- 3) 成分分析をおこなっていないため、朱であるか確実では

ないが、便宜上いわゆる朱とした。

- 4) 凸面広端側中央にタテ縄タタキを切る指先痕跡が、凹面広端側中央に布目痕跡を切る指先痕跡が残る。この痕跡は凸面側に親指以外の四本を、凹面側に親指を使いつまむと痕跡とびつたり合うことから、焼成前に瓦を持ち上げた際の痕跡と考えられる。この痕跡が瓦の中央にあることから、この幅の製品である可能性が高い。
- 5) 神武陵南の発掘調査では、桜川の旧河道が小字「塔垣内」まで確認されており、この地点において洪水被害があった可能性はある(横田 2024)

引用・参考文献

- 愛知県史編さん委員会 2015『愛知県史 別冊 窯業 1 古代猿投』愛知県
- 朝倉弘 1984『奈良県史』第 10 巻 荘園—大和国荘園の研究—奈良県史編集委員会
- 池田保信・藤田三郎(編) 2003『奈良県の弥生土器集成』橿原考古学研究所研究成果第 6 冊 橿原考古学研究所
- 石井則孝 1985『陶硯』ニュー・サイエンス社
- 石田茂作 1936「飛鳥時代寺院址の研究」第一書房
- 石田由紀子 2010「藤原宮出土の瓦」『古代瓦研究 V—重弁蓮華文軒丸瓦の展開—・藤原宮式軒瓦の展開—』奈良文化財研究所
- 伊藤敬太郎 1999「うつされた塔心礎—大窪寺と山本寺—」『瓦衣千年—森郁夫先生還暦記念論文集』森郁夫先生還暦記念論文集刊行会
- 伊藤敬太郎 2002「神武天皇陵考—特に塔垣内廃寺と国源寺を中心に—」『文化財と近代日本』山川出版社
- 今尾文昭 2008『律令期陵墓の成立と都城』古代日本の陵墓と古墳 2 青木書店
- 岩井考次 1937『古瓦集英』岩井珍品屋
- 大脇潔 1995「寺院址調査の成果と課題—飛鳥地域を中心に—」『展望考古学』考古学研究会
- 大脇潔 1997「飛鳥の渡来系氏族寺院と軒瓦」『季刊考古学』第 60 号 雄山閣出版
- 橿原市千塚資料館 1992『企画展 橿原の飛鳥・白鳳時代寺院』
- 金子裕之 1983「軒瓦製作技法に関する二、三の問題—川原寺の軒丸瓦を中心として—」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所
- 小谷徳彦 2009「2 川原寺の丸・平瓦」『古代瓦研究会Ⅲ—川

原寺式軒瓦の成立と展開』奈良文化財研究所
 国立歴史民俗博物館 2006『国立歴史民俗博物館資料図録4－瓦コレクション－』
 佐藤小吉 1944『飛鳥誌』天理時報社
 清水昭博 2009「2 大和の幅線紋・重圏紋縁複弁蓮華紋軒丸瓦」『古代瓦研究会Ⅳ－法隆寺式軒瓦の成立と展開－』雷文縁・幅線文縁・重圏文縁複弁蓮華文軒丸瓦の展開』奈良文化財研究所
 清水昭博 2024「畝傍山麓の古代寺院－大窪寺と山本寺の建立背景－」『古代学と遺跡学－坂靖さん追悼論文集－』坂靖さん追悼論文集刊行会
 杉山真由美 2019「藤原京右京五条六・七坊」『平成29年度[2017年度] 橿原市文化財調査年報』橿原市教育委員会
 第14研究会 2003「王権とモニュメント」編『京都大学所蔵古瓦図録Ⅰ（山野道三コレクション）』京都大学大学院文学研究科21世紀COEプログラム『グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成』
 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
 中島和彦（編）2014『南都出土中近世土器資料集』奈良市教育委員会
 名古屋市博物館 2006『名古屋市博物館所蔵大和古瓦図版目録』名古屋市博物館資料図版目録7
 奈良県立橿原考古学研究所 1980『大和条里復元図』奈良県教育委員会
 奈良県立橿原考古学研究所 1999『橘寺』奈良県文化財調査報告書 第80集
 奈良県立橿原考古学研究所 2005『小泉堂遺跡－大和高田B.P建設に伴う遺跡調査報告（Ⅰ）－』奈良県立橿原考古学研究所調査報告書 88冊
 奈良県立橿原考古学研究所 2009『四条遺跡Ⅰ－大和高田バイパス建設に伴う遺跡調査報告書（Ⅲ）－』奈良県立橿原考古学研究所調査報告書 105冊
 奈良県立橿原考古学研究所 2024『四条遺跡Ⅳ』奈良県立橿原考古学研究所調査報告書 129冊
 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 2010『大和考古資料目録』橿原遺跡資料 古代編 第28集
 奈良国立博物館（編）1982『飛鳥白鳳の古瓦』東京美術
 奈良国立文化財研究所 1960『川原寺発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報第9冊
 奈良国立文化財研究所 1976『平城宮発掘調査報告Ⅶ』奈良国

立文化財研究所学報第26冊
 奈良国立文化財研究所 1981『平城宮発掘調査報告Ⅺ』奈良国立文化財研究所学報第40冊
 奈良文化財研究所 2002『山田寺発掘調査報告』奈良文化財研究所学報第63冊
 花谷浩 2000「京内廿四寺について」『研究論集XⅠ』奈良国立文化財研究所
 花谷浩 2009「1 飛鳥の川原寺式軒瓦」『古代瓦研究会Ⅲ－川原寺式軒瓦の成立と展開』奈良文化財研究所
 春成秀爾 1975「「神武陵」はいつつくられたのか」『考古学研究』第21巻 第4号 考古学研究会
 三好美穂 1996「南都における平安時代前半期の土器様相－土師器の供膳形態を中心とした編年試案」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要 1995』奈良市教育委員会
 保井芳太郎 1932『大和上代寺院誌』大和史学界
 山崎信二 1980「大和における平安時代の瓦生産」『奈良国立文化財研究所学報』第38冊 研究論集Ⅵ 奈良国立文化財研究所
 山崎信二 2000『中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所学報 第59冊 奈良国立文化財研究所
 横田真吾 2024「畝傍陵監区事務所建替工事予定区域事前調査」『書陵部紀要』第75号 宮内庁書陵部

図出典

図1 橿考研1980の条里界、等高線を再トレースしてベースマップとし、遺跡の範囲は奈良県遺跡地図Webの遺跡範囲を再トレースした。

図2～7 初出

図8 1：石田1936、2：奈良博1980、3：石田1936、4：奈良博1980、5・6：石田1936、7・8：保井1932、9：奈良博1980、10・11：石田1936

図9 1：伊藤1999、2：第14研究会2003、3：伊藤1999、4：第14研究会2003、5・6：石田1936、7：保井1932、8～12：石田1936

図10 1～3：橿考博2010、4～6：国立民俗博物館2006、7：橿考博2010、8：杉山2019、9：橿考研2005、10～13：橿考研2009

※図8～10は、文様は転載し、断面は再トレースした。